

最優秀賞（奨励賞）

発達障害と差別

埼玉県立伊奈学園中学校

三年 小林 由季

「死ねよ障害者」

クラスメイトが私に吐いた言葉だ。

私はADHDとASDを持っている。今はそれらをコンプレックスに思ったり隠したいと思ったりはしていないが、少し前はかなりコンプレックスに思っており、本当に信頼している人にしか発達障害のことを話して話していない時期があった。そんな自分を変えたいと思い、勇気を出して発達障害のことを話した際に言われたのが、最初の言葉だった。発達障害を持っているだけで暴言を吐かれなければいけないのか、疑問でしかなかった。

障害者に心ない言葉をかける人というのは、障害者の苦勞も努力も知らず、自分の都合で言っている人がほとんどだ。私も、二歳でADHDとASDがあると分かってから、小学校四年生まで定期的に障害児総合療育施設に通い、診療を行ってきた。幼稚園選びの際も、障害児を受け入れている幼稚園が少なく、母は私を幼稚園に入れるのにとっても苦勞した。やっとの思いで入園した幼稚園でも、落ち着きが

ないため先生や友達に沢山迷惑をかけた。しかし、幼稚園での他の人との関わりや、療育施設での療育を経て、小学校は特別支援学校や特別支援学級ではなく、通常学級に通い、通級指導教室にも通わず、療育施設でも、診察のみの通院になった。しかし、ASD特有の「こだわりが強い」「ひとりごとが多い」などはまだあり、人によつては私を良く思わない人もいた。だが去る人を追おうとはせず、仲の良い人と過ごし、小学校卒業時には他の人と大きな差はないほどに、発達の遅れを取り戻すことができた。中学校三年生の今はADHDとASDを持っていることを公言しているが、中学校一年生の頃は誰にも言っていなかった。このように、障害者は自立するための努力を人一倍している。これはあくまでも一例で、今まで経験してきた苦労は勿論人によつて違う。その努力を知らずに、自分にとって都合が悪いからといって暴言を吐くのは、絶対にあつてはならない。

発達障害があることは、誰のせいでもない。自分が障害を持ちたくて生まれようとした訳でもないし、親も障害のある子どもを産もうとして産んだ訳でもなく、子育ての仕方でも発達障害になった訳でもない。つまり、生まれる前は、発達障害が誰の身に起こるかかわらないのだ。もし自分が発達障害を持つていて、人一倍努力してきたのに人格を否定されたり暴言を吐かれたらどんなに悔しいか、あなたは想像できるだろうか。これが想像できない人は、他人の努力を想像できない、自分勝手な人だろう。

ではなぜ私がADHDとASDを持っていることを公言できるようになったのか。それは、障害の有無に関係なく協力し、共存することが大事だと分かったからだ。

まず、通常学級における発達障害の可能性がある生徒の割合は八・八パーセント。日本では十人に一人が発達障害の傾向があるとされている。つまり、発達障害者はあなたのすぐそばに何人もいるという

ことだ。たとえあなたが発達障害者にこの上ない嫌悪感を抱いていても、あなたの周りから発達障害者を排除することは不可能だ。つまり、どんなに発達障害者への嫌悪感があっても、発達障害者と共存していかなければならない。発達障害者に嫌悪感を持つてはいけない訳ではなく、共存していく努力が大切だ。生きていく上では、苦手な人と関わらなければいけない場面も少なからず出てくる。それを、障害の有無で差別してはいけない。発達障害者といっても人によつて症状や性格、治療法が違う。そのため、発達障害者に嫌悪感を抱いて全くと関わらないのは、差別でもあるが、それ以上に、あなたが損をしていることにつながるのだ。

世の中には様々な人がいる。発達障害者に嫌悪感を抱く人が一定数いることも、我々当事者は十分承知している。しかし、世の中の全ての人が、発達障害者に最初から嫌悪感を持たず、発達障害者と関わる機会を持ち、発達障害者への差別、偏見がなくなることを願っている。

発達障害に悩む当事者へ。発達障害を理由に心ない言葉をかけられても、気にしないこと。そのような言葉をかける人は最終的に周りから人がいなくなるし、あなたの話を聞いてくれる人が絶対いる。発達障害をなかなかカミングアウトできずに周りとの差を感じても、それもあなたの個性。カミングアウトはしてもしなくても良いが、周りと比べる必要はない。それがあなたの持つ大事な個性だから。